

ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス

—女子高におけるエスノグラフィーをもとに—

宮崎 あゆみ

I ジェンダー・サブカルチャー研究

本稿の目的は、ジェンダーの視点で教育社会学におけるサブカルチャー研究を捉え直すことを検討し、実際にエスノグラフィックな調査を通じて、女子高において展開するサブカルチャーのダイナミクスを概観することである。

学校・学級内で、生徒たちは特定の集団に準拠して、独自の価値観を形成し行動様式をあみ出していく。「サブカルチャー」と呼ばれるのは、これらの価値規範や行動様式である。サブカルチャーは、特定の生徒集団の中で、あるいは集団どうしの相互交渉を通じて、そして上位学校システムとの関係において形成され、分化していく。

こういったサブカルチャーに関する研究は教育社会学において盛んに行われ、蓄積されてきた。従来のサブカルチャー研究が焦点を当ててきたのは、「階級」や「アチーブメント」の側面であった。例えば、ウィリス（訳書1985）はエスノグラフィックな手法を用いて、反学校的な仲間集団「野郎ども」のサブカルチャーを詳細に描き出している。野郎どもは、巧みに権威の裏をかき、笑いふざけ、暴力や男っぽさを評価し、今の楽しみに価値をおく自分たちのサブカルチャーを盾に学校に反抗していく。しかし、その野郎どものサブカルチャーは「階級」という側面で描かれることでより明瞭になる。野郎どものサブカルチャーは労働者階級の文化と親近性が深く、彼らは学校のミドルクラスの価値観に反抗することで、逆説的に労働者階級の文化を再生産していくのである。また、ハーグリーブス（1967）やレイシー（1970）は、同じくエスノグラフィックな手法を用いて、ストリーム実施下の学校において生じる生徒の

文化の分化を説明している。彼らによれば、生徒の文化は生徒が報酬分配尺度上に占める地位の高低によって分化し、その尺度として重要なのは「アカデミックアチーブメント」だという。そして彼らは「アカデミックアチーブメント」と生徒の属する「階級」が密接に結びついていることを示唆している。一方、日本の生徒文化研究では、生徒の分化を説明するよりも主にその類型を統計的な方法で明らかにしてきたが、学業成績や教育上の進路志望といった「アカデミックアチーブメント」の側面は重要な変数として注目されてきた（耳塚 1980）。

しかしながら、欧米の研究についても日本の研究についても、従来の研究にはジェンダーの視点が欠けてきたという指摘が多くなされてきた（Anyon 1983, Davies 1983, 天野 1989）。では、サブカルチャー研究にジェンダーの視点を取り入れるとはどのようなことを指すのであろうか。従来の欧米の研究に対して批判が集まっていたのは、そもそも従来のサブカルチャー研究は男子生徒を対象に行われることが多く、そこには女子生徒が文字どおり存在しなかったということである。つまり、女子生徒がどのようなサブカルチャーを形成し、女子生徒自身がどのように学校に適応し反抗しているかについての研究は行われてこなかった。

しかし、サブカルチャー研究にジェンダーの視点を取り入れるとは、女子を対象にすることだけを指すのではない。より重要なのは、「階級」や「アチーブメント」の側面と同様、どちらの性を対象にするのであれ、サブカルチャーのあらゆる部分にあらわれる「ジェンダー」の側面に光を当てるということである。言うまでもなく、学校の中で生徒や教師がただの生徒・教師としてではなく、各階級の文化を背負ったものとして存在しているように、彼らは社会的に構成された「ジェンダー」という関係性のうちに存在している。しかしながら、従来の研究は、社会的に構成された関係性である女性性男性性や性役割、あるいはセクシュアリティといった側面が、他の側面と同じようにサブカルチャーに深く浸透しているということを問題化してこなかった。ウィリスの研究を例にとれば、『ハマータウンの野郎ども』（訳書 1985）は、男子生徒のみを対象にし、女子生徒をステレオタイプの的にしか扱わなかったという点でジェンダーの視点から批判されてきた。しかし、批判されるとすればそれはむしろ野郎どもの女性観のみを問題にしてそのジェンダー観にまで分析が及ばなかったという点であろう。言い換えれば、そこでは、野郎どもの女性への態度について扱われていても、ひるがえって野郎ども自身の男性性のあり方を問い直し、それが野郎どものサブカルチャーの形成にどうかかわっているかについての分析は十分に行われなかったと考えられる。

ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス

一方、日本における生徒文化研究は両方の性を対象にしてきた。しかしながら、日本における研究も「ジェンダー」の側面を十分に扱ってきたとは言えない。日本の研究が性の要因に注目した場合には、女子と男子の違いを記述する性差研究にとどまっている場合が多い。ただし、高校生の構えについての石戸（1982）による研究では、女子と男子の構えの違いが、違いとして記述されるだけでなく、社会的に構成されたものとしてジェンダーの視点で分析され貴重な知見を導いている。しかし、この研究を含めて、日本の生徒文化研究が明らかにした諸類型の内容には、性役割や女性性男性性にかかわる「ジェンダー」の側面に関する項目は含まれていない。また、日本の生徒文化研究について言えることは、それが質問紙を用いた統計的な方法で行われてきたということである。サブカルチャー研究には、このような方法を有効利用することも重要であるが、詳細なインタビューや観察に基づくエスノグラフィーは、文化を実体化して捉えることを可能にする（耳塚 1982）。また、エスノグラフィーは、従来のジェンダー研究がどちらかと言えば重きをおいてきた性役割のメッセージを発する側ではなく、そのメッセージが発せられるもう一方の側にいる、行為者の論理づけや適応と反抗の機微を捉えることを可能にしてくれる。

本稿では、「ジェンダー」の側面がどのようにサブカルチャーにあらわれ、どのように他の側面と絡まっているか。そして、どのような影響を生徒たちのジェンダー・アイデンティティやライフチャンスに与えているのか。そしてジェンダーの再生産にどのように寄与しているのか。こういった「ジェンダー」の視点を取り入れてサブカルチャーを捉え直す研究をジェンダー・サブカルチャー研究と呼ぶことにする。

ジェンダー・サブカルチャー研究によって、これまで等閑視されていた多様な側面の研究が可能となる。エニヨン（1983）は、エスノグラフィックな調査を通じて教師—生徒の相互交渉をジェンダーの視点から考察し、生徒や教師の性役割や女性性男性性がそのあり方に強く影響を及ぼしていることを明らかにした。共学と別学によるサブカルチャーの違いも、従来見過ごされてきた側面に注目することで一層有意義なものとして浮かび上がってくる（宮崎 1993）。

ジェンダー・サブカルチャー研究によって明らかにされる多様な側面は、「アカデミックアチーブメント」や「階級」と独立に行われるのではない。「ジェンダー」の側面は他の側面と複雑にかかわっていることが予想される（木村 1991）。しかし、このかかわりを見ていくことは、女性内の多様性や男性内の多様性を見ることにもつながる。つまり、アカデミックアチーブメントにおいて成功している女性と失敗している女性のサブカルチャーの比較や、あるいは中産階級の女性と労働者階級の女性のサ

ブカルチャーの比較は、サブカルチャーに表出するさまざまな性役割や女性性のあり方、すなわち多様な「ジェンダー」の側面の見え方を明らかにするであろう。

本稿では、実際にエスノグラフィーをもとに、学校の中で展開する多様なサブカルチャーを描くこととする。本稿では、生徒－生徒相互交渉、とくに生徒たちが自ら分類した4つのグループの相互認知に焦点を当てて、ジェンダー・サブカルチャーの一つの試みを提示したい。

II 事例研究

1. 調査の対象と方法

「ジェンダー」の側面は両性を対象に行い得るが、女子生徒を対象とするとき、避けられない側面として明瞭になる。また、女子のサブカルチャーの多様性を見ることができるともあり、女子校を対象に設定した。具体的には、大都市圏にある私立K女子高校を対象とした。K女子高校は、進学別にいくつかのコースを設置しており、本調査はその中でも進学化政策によって設置されたTコース（主に四年制大学希望）と近年廃止の方向にあるAコース（主に就職または専門学校希望）の第3学年に焦点を当てた。クラス数はTコース2、Aコース7クラスである。

筆者は、国語の産休講師（第3学年Aコースの古典、就職対策作文漢字担当）としてフィールドに入り、参与観察とインタビューを行った。観察期間は、1991年の4月から9月の半年間である。週3日授業を担当し、たいてい週4日、7月からはほぼ毎日通った。参与観察は、他の教師の授業やロングホームルーム、教師たちによる生活指導研修や朝の校門での取り締まり、部活や委員会、生徒総会・スポーツ大会・文化祭・合唱コンクールなどの行事など学校生活のさまざまな場面に及んだ。生徒との日常的な会話の他に、観察期間の後半には、ふだん行動を共にする仲良しグループへのインテンシブなインタビューを行った。インタビューはAコース4クラス（選択クラスの小クラス1を含む）、Tコース1クラスを対象に、49グループ131名（Aコース34グループ、Tコース13グループ、演劇部など他のコースも含むコース混合グループ2グループ）に対して行い、インタビュー対象クラスの生徒で筆者の時間的都合で行えなかった分に対してはアンケートで補った。インタビューの時間は、1グループにつき45分（1人の場合）から5時間、場所は生徒に選んでもらい、学校（教室、部室など）、喫茶店、予備校、カラオケボックス、生徒宅など多岐にわたっている。生徒とともにする行動は観察期間をへるに従って増え、受験勉強の手伝いから学校外の遊び

までともに行った。その他、教師にもインタビューやアンケートを行った。

2. K女子高校におけるジェンダー・サブカルチャーの枠組

K女子高校における観察において、主要なドメインとなったものの1つにグループがあった。インタビューや観察において、生徒たちは自らをはっきりとした境界をもつ「グループ」に区別し、多くの行動（移動教室、お弁当、トイレなど）を同一のグループとともに行っていることが明らかになった。生徒たちは自らを4つのグループに分類していた。その4つのグループは、お互いに相違点を批判しあうことでそれぞれのサブカルチャーの特徴を浮かび上がらせている。その中で浮かび上がる特徴は、従来のサブカルチャー研究ではとらえられない「ジェンダー」の側面において明瞭になるものであった。

本稿では、生徒の側の相互認知に絞って考察を進めるが、その前にサブカルチャーが背景とする学校に簡単に説明を加え、サブカルチャーが形成される基盤となる「グループ」の形態についても概略を描くこととする。

(1) サブカルチャーの背景——学校

K女子高校は入学時から募集基準が異なるトラッキングを導入しており、数年前に設けられた進学コースが急激な進学校化の担い手となっている。コースによりカリキュラムは大きく異なり、Tコースが受験科目中心の手段的カリキュラムであるのに対して、Aコースは家庭科や芸術が多い表出的カリキュラムになっている。コースによって教師の評価も大きく異なっている。Aコースに対しては学校の勉強との齟齬や生活指導の必要性が感じられているが、それに対し、進学校化の担い手となるTコースには、補習や専任講師の配置などの優遇措置が講じられている。

進学校化にともなって規則の取り締まりは緩められている。教師たちは年齢や性別やタイプによってストラテジーを編み出して、主に下位ストリームの「問題生徒」に対応していたが、それでも全体として生活指導は減っており、教師の仕事は「肉体労働」から「アカデミックな仕事」に変化しつつあると言われている。

しかしながら、このような学校内の変化にもかかわらず、チャーターは低いままである。これは進学校化を急速に成し遂げたこの学校の特殊な歴史に起因する。低いチャーターは生徒たちに大きく影響を与えている。生徒へのインタビューでは、低いチャーターが頻繁に言及されたが、それには「学校の外からバカだと思われる」ということにとどまらず、「性的に奔放なイメージでとらえられている」ということが多く含まれていた。女子校のチャーターが進学率だけではなく、「お嬢様学校」など

と言われるように、性的な貞淑さという別の軸で評価されるということは興味深い。

(2) グループの形態についての概略

サブカルチャーの内容に触れる前に、それが形成される基盤となっている「グループ」の形態の概略を説明する必要がある⁽¹⁾。「グループ」は、生徒たち自身の説明によれば、主に「勉強グループ」「オタッキーグループ」「ヤンキーグループ」「一般グループ」に分化している。勉強グループは、自らのグループを「成績がいい」などと説明し、他からも「勉強してる」などと説明され、ほとんどが進学を希望している。オタッキーグループは漫画など共通の趣味で集まっているグループであり、「オタッキーグループ」と呼ばれている。ヤンキーグループは他のグループから「ヤンキーグループ」と呼ばれており、自分たちのグループを「ケバイっ子グループ」「遊びっ子グループ」「授業中うるさいグループ」などと説明している。一般グループは、Aコースにおいて「一般グループ」「ふつうのグループ」などとひとくくりに呼ばれているもので、「外向系一般グループ」「勉強系一般グループ」などと分化されて説明される場合もある。

Aコースにおいては、ヤンキーグループ、勉強グループ、オタッキーグループが1つずつ（数名から9名）あり、それぞれがグループの特徴の違いを意識し、強い境界を維持している。一般グループは、大小いくつかのグループがあり、クラスの半分以上がここに含まれる。それに対し、Tコースでは、ほとんどが勉強グループ、オタッキーグループに含まれ、ヤンキーグループと呼ばれるものはない。グループの境界は、すべての種類のグループが同居するAコースに比べて緩やかで、流動性がある。

それぞれのグループは、はっきりと分化し、その分化を強く意識しているが、それだけではなく、お互いのグループを差異化し、ステレオタイプを付して批判し価値づけしあっている。Aコース内では各グループの特徴の違いが顕著であり、対立もまた顕著である。また勉強グループが多いTコースと一般グループやヤンキーグループが多いAコースとのコースどうしの対立も激しく、スポーツ大会などの行事にはとくに表面化する。次に、こういったグループを基盤として展開する女子生徒の多様なサブカルチャーのダイナミクスに焦点を当てる。

3. サブカルチャーのダイナミクス

対立しあう多様なサブカルチャーの記述は以下の5点から行う。すなわち、規則への対応、制服の着方を中心とした外見、学校外の世界・話題、性役割である。

(1) 規則への対応

ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス

まず、各グループは、規則に対する対応や教師との相互交渉のあり方において異なっている。もっとも学校に反抗的なのはヤンキーグループである。彼女たちは規則を破っても結局たいしたことにはならないことを知っている（「おどかしてるだけで赤点はつかない」「停学の憂き目にあってもめったに退学にはならない」「タバコが見つかってもチクられなかった」）。彼女たちにとっては教師との駆引きも「生徒手帳に押される違反のはんと集め」のように、一種のゲームになる。もっとも彼女たちも表だった対立状況を作ることはあまりしない。教師に注意されたときは、まず走って逃げるか、「指導しにくい状況」を作ることが多い。「指導しにくい状況」として、教師の話題に上ったり観察されたりしたものには、「とぼける」「『先生かわいいー』『ねえこの前の話どうなったの』『トイレに行ってきていいですか』など巧みに話をそらす」「無視して歩き出す」「無視して友達と話す」「『ブス』『足が短い』『結婚できないくせに』など教師の弱点をつく」などがある。「注意されている生徒に別の生徒が話しかける」というチームプレーも観察された⁽²⁾。

一般グループは、規則は守らず、学校の行事などにも積極的に参加しない場合が多いが、教師と表立って対立するようなことはしない。規則破りの注意に対しては、注意される前に走って逃げたり、規則違反をその場で直して教師が通り過ぎた後でまたもとに戻すなどの一時的な対策で乗りきっている。そもそも教師の目はヤンキーグループのほうに向いており、多少の規則違反で痛い目にあうことはまずない。そして、彼女たちは教師と対立する危険を冒すよりは、学校の中にグループというごこちのよいものを築きあげ、そこを学校生活の中心にすることで学校との齟齬を乗り切っている⁽³⁾。

ヤンキーグループや一般グループに対して、勉強・オタッキーグループは規則を守り学校の行事などにも積極的に参加しており、教師に対して対策を講じる必要がない。Aコースの場合彼女たちの多くは風紀委員、学級委員である。彼女たちはとりあえず教師に印象が悪くないように振る舞うことを心がけている。学校に適応的な彼女たちは自分たちは教師に優遇されているという。

こういった規則や教師への対応の違いはお互いを批判する材料となっている。勉強グループやオタッキーグループからは、ヤンキーグループに「かっこつけてる」「わざわざ損してる」「(行事などで)やる気がない」などの批判があり、勉強グループやオタッキーグループへは、その教師への態度に対して「いいこちゃん」という批判が挙がっている。しかし、各グループの批判が集まったのはこのような「反抗する」「適応する」という態度そのものではなく、次に述べる制服の着方などに具体的に現

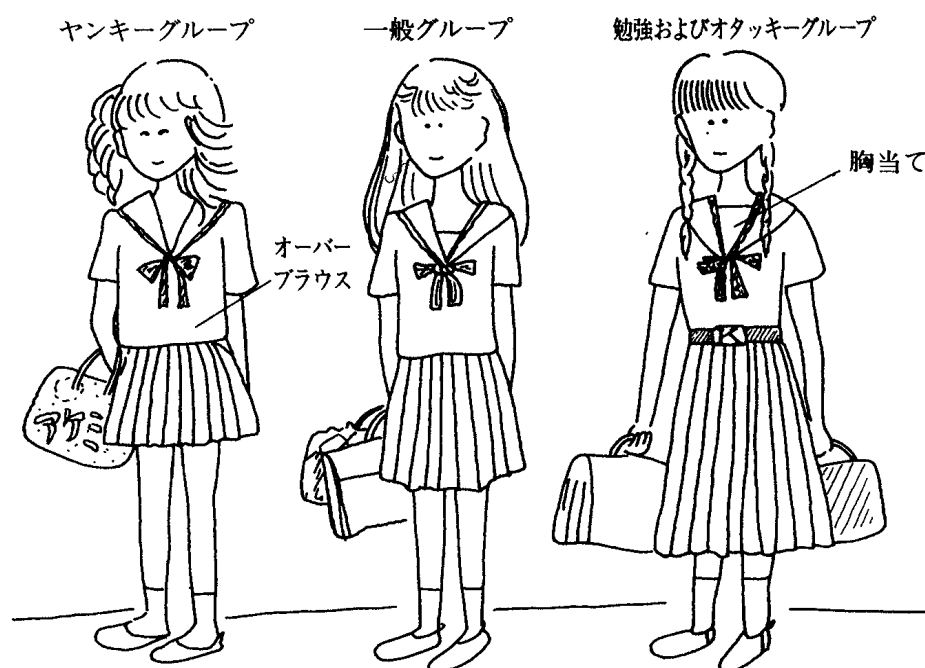


図 制服(夏服)の着方の典型例 (図は実際のデザインとは変えてある)

れるようなその反抗や適応の内容であった。

(2) 制服の着方を中心とした外見

それぞれのグループの規則や教師への対応の仕方が現れているものの1つに、それぞれの制服の着方がある。それぞれのグループは、スカートの長さ、ベルトの着用、胸当ての高さ、カフスボタン、ブラウスの着方、かばんの飾り、髪形、化粧などにおいて、異なっている。勉強グループやオタッキーグループは、概ね学校の規定どおりに制服を着用している。すなわち、長いスカート、高い胸当て、きちんと結わえた髪などである。それに対して、一般グループとヤンキーグループは彼女たちなりに制服を大きく改造している。例えば、一般グループは、スカートの裾を幾らか切り、ウエストで2つ3つ折ってスカートをひざ丈まで短くする。胸当ても半分くらいまで下げている。髪の毛は結ばずに下ろしているものも多いが、パーマをかけているものはそれを隠すために結んでいる場合もある。ヤンキーグループは、スカートの裾を切ってひざ上まで短くし、胸当てはすべて取っている。髪は脱色して茶色にしており、学校でも口紅、ファンデーション、アイシャドウなどの化粧をしている。

一般グループとヤンキーグループの制服改造の程度の差は、彼女たちの規則への対応の違いを示している。一般グループの改造の程度がより小さいのは、彼女たちが教師の目を逃れるための対策を講じているからである。例えば、一般グループの生徒がスカートをウエストで折って調節するのは教師に注意され(そうになっ)たとき「即

ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス

効おろす」ことができるようにしておくことで教師の叱責を免れるためである。それに対してヤンキーグループは、逃げを打つことをしない。彼女たちの脱色してしまった髪、切ってしまったスカート、取ってしまった胸当ては、後戻りのできない反抗の一手段となって、教師たちとの対立状況を生み出している。

この制服の着方を中心とした外見は、グループに関するもっとも目立つ違いとしてグループ相互に認識されている。「スカートが長いのはBコースの子」「ヤンキーグループの子って必ず髪茶色」というように、他の生徒の服装は、その生徒がどのグループに属するかという情報を読み取ることができる目印になる。そして、彼女たちは「カフスボタンはまじめな子に見えるからやらない」など、制服の着方の違いで自分の属するグループが明らかになるように「演出」しており、同じグループの生徒は制服の着方が非常によく似ている。

しかし、より重要なのは、制服の着方を中心とする外見の違いが、目に見える顕著なものとして、各グループがもっとも頻繁に批判しあい、価値付けしあう材料となっているということである。そしてその批判には、お互いがふさわしいと思う女性性の違いが浮かび上がっている。「一般グループ」や「ヤンキーグループ」は、「勉強グループ」「オタクグループ」の工夫のない学校の規則どおりの制服の着方に対して、「まじめ」「かわいくない」「おしゃれをしない」「汚い」「暗い」「オタクっぽい」などの批判をしている。例を挙げよう⁽⁴⁾。

●キリコ「生徒会ってさ、ひざ下10cmのスカートでさ、カバンと学生カバン両方の手にもってたり」

まち子「カバンいまだき厚かったり」

きぬ子「きれいなんだよね、カバンがね」

まち子「で、カバンの中に勉強道具も入ってるけど漫画も入ってるとかね、しかも漫画が目キラキラとかそういうやつ」(中略)

ナナエ「髪の毛ベタッぽくて洗ってないんでしょ。かたまりができちゃってんでしょ。わかれちゃってんだよね」

キリコ「襟元白くなってんの。フケつもって」

きぬ子「1980円ズボンとかね」

—39(A)

しかしながら、「一般グループ」や「ヤンキーグループ」の短いスカートや胸当ての低さに向けられた批判はより激しいものになっている。「勉強グループ」や「オタ

「ッキークグループ」は、彼女たちのことを「品がない」「男にもてたい」と批判する。しかし、とくに厳しい批判を浴びたのは「ヤンキーグループ」である。そのより短いスカートや胸当ての低さ、化粧に対しての「ケバイ」という批判は、制服の改造を「かわいい」と評価する「一般グループ」からも挙がっている。例を挙げよう。

- ゆり子「ケバイのはいや。近所にケバイ人で同じ学校の人いて、近所の人はコースとか分かれてるの知らないからやだなんて思う。共学だったらケバイ人いなくなるんじゃないかな。ケバイ人は、自分でいいと思ってる。品がない。やり方がきれいじゃない」 —16(T)
- ひろ子「ここ（胸当て）をなくすってことは、女としての胸を強調するってことだから、私だったらこわい。うちのK女っていうのはヤリ女って呼ばれてるから、まじめそうな顔してても、『今夜ヒマなの』とか『いくら』とか言われるんだって。（中略）そういうのは困っちゃうだろうな」 —25(T)
- レイコ「胸当てないのとか、危ないよ。うちのクラスなんか全部ない人いて、なんかこっから見えちゃうっていうか（笑）だって、危ないよ」 —8(A)
- てい子「（スカートが短いのは）本人にとってはかわいいつもりなんだから。よっぽどさ、細くてすごい自信がある人ならいいけどさ。（中略）目立ちたいっていうか。もてたいみたいな。男の人に声をかけてもらいたい」 —26(A)

彼女たちは下線部のように、女性のセクシュアリティを強調することを批判している。その批判は最初の2つの例のように、学校の低いチャーターとも関係している。彼女たちの批判が、セクシュアリティの強調を学校の低い評判と結びつける社会の論理とも重なっているということは興味深い。しかしながら、彼女たちは女性性そのものを否定しているわけではない。彼女たちから出た「やりかたがきれいじゃない」「お嬢さんて感じじゃなくねえちゃんて感じになる」「制服には化粧は似あわない。制服に似合うかわいさ、きれいさってあると思う」といった批判からは、「貞淑さ」「品のよさ」という別の女性性が評価されていることがわかる。

(3) 学校外の世界・話題

同じくグループのお互いの批判が集まったものとして、各グループの話題の違い、学校外の世界の違いがある。これらのことに関するお互いの批判の内容は、制服の着方にまつわる批判と重なっている。

各グループは、学校外の生活の過ごし方に関して相互の違いを認識しあっている。前述のように必ずしも学校に適応していない一般グループやヤンキーグループがもつ

ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス

のは、学校外の世界の広がりである。一般グループの生徒の多くは、飲み会、買い物、カラオケ、映画など学校外の行動範囲が広く、コンパや紹介⁽⁵⁾といった異性と接する機会も頻繁にある。ティーンエイジカルチャー（音楽・ファッション等）への関心も高い。アルバイトもほとんどの生徒が恒常的にやっており、アルバイトから広がる世界や人間関係もある。「彼氏」のいる生徒も多く、「彼氏もち」はたいてい高く評価される。ヤンキーグループは学校への欠席率が高い分、学校外の広がりもさらに広くなり、学校へのコミットメントより外の世界へのコミットメントの方がはるかに高い。

それに対して、勉強グループは学校外の世界の広がりをもたない傾向にある。ティーンエイジカルチャーへの関与は少なく、学校と家の往復が生活の基本となっている。それ以外の行動（「学校帰りの飲食」「買い物」「野球観戦」など）もあるが、「定期券の範囲内で」「塾の前に時間があるとき」「テストが終わった日に」などの限定がつき、さらに3年になってそういった行動は減ったという。アルバイト経験のない生徒も多い。異性と接する機会も多く生徒はないかほとんどない。オタッキーグループは、一般グループやヤンキーグループのような学校外の生活を送らないが、それに代わるものとして、漫画を中心とした独特の文化をもっている。

このような生活のあり方の違いと関係して、各グループの話題も異なってくる。各グループが話題という日常的なレベルにおいても違いを意識していることは興味深い。「違うグループの子としゃべるときは話題を意識して合わせる」、あるいは「話題が違って話ができない」という生徒も多い。どのグループでも教師やクラスメート、部活、家族のことなど「身近に起こったこと」や「テレビ」「冗談」などの話題は話される。しかし、大きく異なる部分はTコースを中心とする勉強グループは受験の話や勉強の話をするということである。Aコースを中心とする一般グループやヤンキーグループは男の子の話、彼氏の話、前の日に出かけた話が多いという。勉強グループの生徒も恋愛の話は話題に上るが、一般グループのほとんどが現実の異性との接触に基づいているのとは異なっている。オタッキーグループは圧倒的に漫画の話が多い。

これらの学校外的生活や話題の違いもグループどうしの批判の材料となる。学校外的生活について勉強グループに向けられた批判は、「行動範囲が狭い」ということに向けられている。具体的には、「皮肉で言えばいい子」「外で遊ばなそうでつまらない」「後であるとき遊べばよかったって後悔する」「社会勉強が足りない」というような批判である。話題に関する批判も、「行動範囲の狭い」勉強グループの「現実ばなれしている」ことを突いている。またオタッキーグループの独特の話題に対しても批

判が挙がっている。例を挙げよう。Tコースの生徒だが「自分たちは他のTコースの生徒とは違って勉強グループではなくAコースの一般グループに近い」といって勉強グループ批判をした2人の話である。

●みほり「このグループは男の子のことが多い」

たみ子「現実っぽいっていうか、まわりの男の子の話で、芸能人の話とかしない」

みほり「他のグループは野球の選手がどうか、走る方向が現実ばなれしてる」

たみ子「漫画とかでこの人いいとか言って」

みほり「他のグループ（勉強グループ）の人と、大学の話とか将来の話することありますけど、男の子の話だと『どうせいないから』とか『あらそう』とかで終わっちゃうんですよね。盛り上がらない。（中略）私達は男の子や彼氏の話で盛り上がりたいのに、だってふつうの女子校そうでしょ。ああいうのしたいのに野球の話で盛り上がったりして話に入れないの」 —17(T)

しかし、この一般グループやヤンキーグループの「行動範囲の広さ」は勉強グループやオタッキーグループにしてみれば批判材料となる。勉強グループやオタッキーグループから見れば、一般グループやヤンキーグループの「行動範囲の広さ」や「異性とのつきあい」は、「節操のなさ」となり、それにまつわる話題は「くだらない話題」となる。オタッキーグループが話した例を見てみよう。

●かおる「私たち以外は、化粧品」

リッコ「男の子のこと。その夜あったこととか」

あさ子「飲みに行こうとかほざいてるしね。休み近くになるとパンフ広げて」

リッコ「旅行行こうとか」

あさ子「彼氏と行くのとか」

リッコ「勝手にいけみたいな」

あさ子「とうとうどうなるんでしょうか」

リッコ「いいじゃん、もう傷物なんですよ」 —23(A)

この例のように勉強グループやオタッキーグループの間では、「交際範囲の広さ」は必ずしも評価されず、「彼氏もち」も必ずしもステイタスにはならない⁽⁶⁾。とくにヤンキーグループには、制服の着方に関する批判と同様、「性的に奔放」であるとの

レッテルが貼られている。ヤンキーグループは、確かに性の話題でオタッキーグループをからかうなどしているが、「不特定多数の人と関係をもつ」「男性の性的対象としてふるまう」などの批判は実際には彼女たちにあてはまるものではない。それにもかかわらず、こういった女性性にかかわるイメージがここでも批判の理由にされていることは重要である。

(4) 学校の勉強への価値づけ

学校において重要な要素である勉強についても各グループの態度や価値づけは異なっている。勉強ができるということは、勉強グループにおいては高く評価される。勉強グループがほとんどを占めるTコースでは生徒は休み時間に勉強し、授業中にもよく発言するが、他のコースの勉強グループは「休み時間に教科書広げたらのけもの」「ウォークマンで（勉強していないことを）カモフラージュ」というように学校では勉強しない。

それでは「学校の」勉強ということに限れば評価はどうであろうか。「学校の勉強は役に立つか」という質問に対して「役に立つ」と答えたのは勉強グループの一部であり、どのグループも「役に立たない」という答えが多かった。しかし、各グループはその「役に立たない」理由においては大きく異なっていた。結論から言えば、一般グループの生徒は「将来のために役に立たない」、勉強グループの生徒は「受験に役に立たない」という理由を述べている。勉強グループの生徒たちは学校の勉強が受験勉強にそぐわない科目や内容であることに強い不満を表明している。それに対して、進学する生徒の少ない一般グループの生徒たちは「何のためにやるのかわからない」と勉強自体に疑問を感じている。彼女たちは自分の将来と学校の勉強に断絶があることを感じている。彼女たちの多くは「物理とか数学とかほんと役に立たないよね。頭に来る」とひとしきり主要科目、とくに理系科目を批判した後、Aコースのみで必修になっている保育と家庭科のみは唯一役に立つ科目だと述べた。批判の例を挙げよう。

●キリコ「数学だってさ、割り算とか掛け算とかあれだけでできてればいいよね。今のデルタとか絶対使わないよね。」

まち子「絶対使わない（笑）」

キリコ「家計簿とかにデルターあーあーあー（みんなで声を合わせてグラフを書くまねをしながら）こんなになっちゃってやんないよね。（笑）」 —39(A)

彼女たちは、「役に立たない」理由として、「女の子として」「主婦をやる」「結婚する」「子どもを育てる」という私的領域に向かうであろう「自分の将来」とのずれを挙げている。Tコースの生徒からはこれらの理由は出されず、家庭科を評価したのもほとんどいない。勉強グループと一般グループの生徒との間には明らかに異なる判断の軸が存在していることがわかる。

(5) 性役割観

この異なった軸は彼女たちの性役割観の違いに現れている。一言で性役割といってもそこには様々な局面があり、一人の生徒においてさえゆらぎが見られる。しかしながら、そのゆらぎを加味しても、グループによって性役割観における違いが見られた。ここでは、性役割の中でも職業への志向性を取り上げる。女性の公的領域への志向性は、現状として、家庭という私的領域との葛藤に満ちた選択として存在している。彼女たちへのインタビューの内容は、公的領域の尊重（仕事をずっと続ける）、私的領域と公的領域との兼ね合い（子育てが終わったら常勤、翻訳など家でできる仕事をずっと続ける、仕事を続けたいが家庭のことを考えて迷っている）、私的領域の尊重（家庭に入る）と分類できた。結論を言えば、勉強グループと一般グループは顕著な違いを見せた。勉強グループは職業継続への志向性が高いという要素をもっており、一般グループは家庭への志向性が高かった。オタッキーグループは全体として顕著な傾向は見せていないが、「（一般グループのように）イケイケでOLで主婦にはなりたくない」など、一般グループが家庭への志向性を見せていることに対する批判を挙げているところもあり、一般グループよりは職業継続への志向性が高い。ヤンキー

表 グループごとの性役割

		勉強グループ			オタッキーグループ			一般グループ			ヤンキーグループ
コース・コース合計		T	A	合計	T	A	合計	T	A	合計	A
公的領域の尊重 仕事を続ける		19 (73.1)	9 (50.0)	28 (63.6)	1 (50.0)	4 (33.3)	5 (35.7)	2 (100.0)	13 (21.0)	15 (23.4)	3 (42.9)
私的領域 兼領域 兼ね合い 公的領域	子育て終わ ったら常勤	2 (7.7)	2 (11.1)	4 (9.1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (4.8)	3 (4.7)	0 (0)
	家でできる 仕事	2 (7.7)	1 (5.6)	3 (6.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (6.5)	4 (6.3)	0 (0)
	公希望だが 私と迷い	2 (7.7)	0 (0)	2 (4.5)	1 (50.0)	2 (16.7)	3 (21.4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私的領域の尊重 家庭に入る		1 (3.8)	6 (33.3)	7 (15.9)	0 (0)	6 (50.0)	6 (42.9)	0 (0)	42 (67.7)	42 (65.6)	4 (57.1)
合計（人数） （％）		26 (100.0)	18 (100.0)	44 (100.0)	2 (100.0)	12 (100.0)	14 (100.0)	2 (100.0)	62 (100.0)	64 (100.0)	7 (100.0)

ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス

グループでは職業継続への志向性を示すものと家庭志向を示すものに分かれ、職業志向をもつものはメイキャップアーティストやパタンナーのようにアカデミックアチーブメントとは関係をもたない職業を希望していた。

各グループが異なった性役割観をもっていることは、グループインタビューにおけるさまざまな場面で表れた。それぞれのグループには性役割観に関する異なった論調があり、そのことはグループの論調に合わない生徒がいてその生徒が批判されることで一層顕在化した。例を挙げよう。一つ目の例は、Tコースのグループインタビューにおいて一人だけ仕事との兼ね合いではあるが家庭志向をもつ生徒（こと子）がいた場合、次の例はAコースのインタビューで一人だけ仕事との兼ね合いで家庭と仕事の兼ね合いを考えている生徒（あい子）がいた場合の例である。

- たつ美「私、死ぬまで働きたいの。（中略）お昼とかテレビ見て、ふつうのなんか働いてないおばさんみたいのいるでしょ。ああいうのすごいムカツクの」
こと子「だからそうなる一步手前で働きはじめるの（笑）」
みお子「私も働き続けていきたい。だから、結婚願望がぜんぜんなくて、したいって思わないのね」
こと子「いやーしっかりしてるよ。私って古風じゃない。新しい今を生きてるって感じで、私は昔ながらの……」
—47(T)

- AM「そしたら仕事続けてる？」
なお美・よう子・はるか「家庭に入る」
あい子「私は続けてると思う。放送関係で」
はるか「えー！ そうなんだ。そういうのあい子むいてないよ。でもあい子って強いよね」
あい子「そういうこというかな。でもね、夢が2つあるの。エレクトーンの先生っていうのもやりたくって」
なお美「そういうお母さんていいね」
はるか「うん、だったらいいいね」
あい子「だからキャリアウーマンまでは行かなくて」
なお美・よう子・はるか「うん」
— 9(A)

このようにインタビューでは、それぞれのグループに、そして勉強グループが多いTコースと一般グループが多くを占めるAコースに性役割観に対する異なる論調があ

ることが示された。Tコースでは、ふだんの会話でも将来仕事を続けたいと話す傾向が強いということが多く言われ、それに影響を受けたと話す生徒もいた。このことは、それぞれのサブカルチャーがジェンダー・アイデンティティに影響を及ぼしていることを示唆している。また、Tコースでは、仕事を続ける理由として「せっかく勉強したのにもったいない」と話す生徒が多い。勉強グループの生徒たちの将来の公的領域への志向性は、「勉強している」という今の業績志向とも関係している。しかし、勉強グループの多くは家庭を全く否定しているわけではない。彼女たちの公的領域への選択も私的領域との葛藤の上に成り立っていることは改めて付け加えなければならない⁽⁷⁾。

4. まとめ——サブカルチャーに現れた「ジェンダー」の側面と学校という文脈

以上の5点にわたって生徒たちが自ら分類した4つのサブカルチャーの違いとその相互認知が検討された。勉強グループは学校に適応的であり、業績主義にのっとり、勉強することを評価していた。オタッキーグループも、独特の文化をもち、勉強グループほど勉強に熱心でないことを除けば、勉強グループに似た傾向をもった。一般グループは業績主義や勉強を重要な要素とする学校に齟齬を感じ、学校とつかずはなれずの関係を保っていた。学校にもっとも適応していないのはヤンキーグループであった。彼女たちは学校よりも学校の外の世界へのコミットメントのほうが高かった。

しかし、各グループの相互批判がもっとも集まったのは、従来の研究で扱われてきたこのようなサブカルチャーの側面、すなわち学校への適応の違いや「アカデミックアチーブメント」の違いという側面ではなかった。各グループの相互批判はこれらのグループのサブカルチャーが、これらの側面において分化しているばかりではなく、性役割や女性性という「ジェンダー」の側面においても分化していることを示している。勉強グループは「品のよさ」「貞淑さ」を評価し、「彼氏」や異性との接触をあまりもたず、「節操のなさ」や「セクシュアリティの強調」を批判した。一般グループの生徒たちは、逆に、勉強グループやオタッキーグループを、「かわいくない」「オタクっぽい」など彼女たちなりの女性性に基づいた外見への批判、「世界狭い」「非現実的」など女子のティーンエイジカルチャーへの関与が少ない点への批判などによって退けた。彼女たちは、業績主義に適応し、将来の生活において公的領域を尊重することを述べた勉強グループと異なり、学校の価値に対置して、将来自分が尊重するであろう私的領域への価値を重んじた。ヤンキーグループは、勉強グループやオタッキーグループに一般グループが向けたような批判を行った。しかし、彼女たちは他のグル

ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス

ープからは、セクシュアリティを強調した女性性のイメージを付与されて激しい批判を浴びていた。

これらのことは、「ジェンダー」の側面を取り入れてはじめてサブカルチャーの中に可視化されるものにほかならない。そしてここで言えるのは、従来研究されてきた側面と、これらの「ジェンダー」の側面が特定の結びつきをもっているということである。「アカデミックアチーブメント」において成功しているグループは、業績志向と関係して公的領域を尊重し、また「貞淑な」「品のよい」女性性を評価している。一方、「アカデミックアチーブメント」において失敗しているグループは、「ケバイ」女性性と自らを結びつけ、また結びつけられてもいる。

これらのサブカルチャーは、言うまでもなく、生徒どうしの認知に現れるだけではなく、K女子高校という文脈の中に位置づけられている。勉強グループやオタッキーグループは、進学化を成し遂げようとしているK女子高校ではとくに、業績達成が高いという面、あるいは学校に適応的であるという面で優遇されており、学校と論理を同じくしている。しかし、学校は生徒たちを、適応の違いや「アカデミックアチーブメント」の違いのみで評価してはいない。学校は化粧を禁止するなどにみられるように「ケバイ」女性性を排除しようとしている。学校は業績主義に貫かれているように見えながら、それと同時にふさわしい女性性をも提示していると言える（木村1990）。すなわち、ヤンキーグループは、「教師に対して従順ではない」「成績が悪い」ということで学校の対局に置かれているだけではなく、彼女たちの「ケバイ」とされる女性性のために対局に置かれている。

このような学校の中で、上位ストリームを中心とする勉強グループやオタッキーグループのほうで、自らを正当化する論理を見つけやすい立場にいることは、観察で見られたコース対立やコースに関するインタビューにも現れている。上位ストリームを中心とした勉強グループ、オタッキーグループによる下位ストリームへの批判は、「他のコースとの交流はあるか」と聞いただけで飛び出し、他の質問項目にもわたる激しいものになっている。また、Aコースの勉強グループやオタッキーグループもAコースと自らを切り放し、Tコースの立場に自分をおいてAコースの一般グループやヤンキーグループに批判を向けている。例を挙げよう。

●けい子「そう、ケバイのがね」

まどか「でももうAコースとらなく（募集しなく）なったからいいけど」

けい子「髪の毛茶色くしてたり、ときたま化粧してたり」（中略）

けい子「(ケバイのは) 困る, こっち (T コース) は。お願いだから制服脱いでや
ってちょうだいって感じ」

まどか「そうそうそう。いっしょにいたくないし, 同じ制服着てんのがやなのね」

けい子「そう」

まどか「同類に見られるみたいなの」 — 6(T)

●あつ子「A コースの人とか, 他の学校から悪く思われてるから」

るみ子「うちは近所に同じ学校の人いないからいいけど, 言ってるひと多いよね。

T コースだけ制服変えてほしいよね」

ふみえ「A コースのほう人数多いからそういう (ケバイ) イメージ強いよね」

るみ子「けどもう, A コース今年からなくなるしね」 —18(T)

この例に見られるように, 彼女たちの批判は, 進学化政策をとってA コースを廃止する方向の学校の論理に力を得ているが, それはすぐさま, 化粧などを禁止して「ケバイ」女性性を排除する学校と同じ論理にも結びついていく。

逆に学校の中で自らを正当化する論理を見つけにくい立場にあるのが, 下位ストリーム, とくにヤンキーグループの生徒たちである。インタビューでも下位ストリームの一般グループやヤンキーグループは, 同じ下位ストリームの勉強グループやオタッキーグループへ激しい批判を行ったが, 学校が優遇する上位ストリームの生徒たちに対してはその批判の矛先は鈍る。「他のコースとの交流はあるか」というコース対立に関する質問に対して, 半数は「ない」という答えのみで, 「A コースとT コースは仲悪いことあるんだって」と聞いた場合でも「別に交流ない」「バカにされても仕方ない」という答えが多い。スポーツ大会などの行事での対立場面やインタビューの中で試みられた弁明も「上位ストリームからバカにされている」という関係を読み替える代替物とはなっていない。わずかに自分たちが上位ストリームの生徒たちよりも「かわいいこと」, 「家庭をしっかりと守るであろうこと」, 「勉強だけやっているのではないこと」など学校の論理に対する彼女たち側の論理が正当化の論理として何人かから挙げたが, 生徒たちは学校のT コースへの優遇措置やA コースの廃止を敏感に意識しており, たいていは, 対立場面においても「A コースだからってなめんなよ」というように上位ストリームとの逆転の論理を生み出すことに失敗している。そして, とくにヤンキーグループの立場は学校の中で厳しいものとなっている。彼女たちは, 他のグループの生徒よりも教師に強く出るなど, 一見強い立場にいるようにみえて, 「あたしたちはクラスの癌グループ」「ここで話してると笑えるけど (他のグループ

から)視線がくる」など話しており、学校の論理と対局にある自分たちの立場を意識している。確かに、彼女たちは学校の業績主義において敗者であり、それは進学政策を推し進めるK女子高校において顕著である。しかし、彼女たちが弱い立場に置かれているのは、それだけのためではない。学校の論理、および学校の論理によりそうグループによる、進学化と逆の方向に向かうヤンキーグループへの批判は、際立ったセクシュアリティへの批判にすりかわっていく。そして、さらに重要なことに、この批判は社会的評判という外の論理とも結びついている。上位ストリームの生徒たちの「ケバイ」女性性への批判は、インタビューに現れたように、自校の低いチャーターを低いストリームに起因するためでもあった。ヤンキーグループが「ケバイ」女性性を一手段として学校の中で反抗しえても、社会的評判という外の論理は、それを低いものとして評価するであろう。こうして彼女たちはサブカルチャーにおける「アチーブメント」や学校への適応の側面だけではなく、「ジェンダー」の側面においてさらに強く退けられることになるのである。

本稿では、以上のように、ある女子高における4つのサブカルチャーのダイナミクスを示すことで、ジェンダー・サブカルチャー研究の1つの試みを提示した。ジェンダー・サブカルチャーは他の学校においても——男子校においても共学においても——展開されており、様々な側面が研究課題として残されている。これからの「教育とジェンダー」研究は従来の研究の概念や枠組をとらえなおしていくことになる。その地平を与えてくれる1つの領域がジェンダー・サブカルチャーなのである。

〈注〉

- (1) 「グループ」に関しては、その構成原理やグループ間の相互交渉のあり方、グループ内の多様性などの詳細な説明はここでは省き、概略のみを述べる。
- (2) 本稿では、教師—生徒間の相互交渉は主題ではないので詳細は省くが、生徒は「指導しにくい状況」を作る際に、自分の女性性を利用することがある。以下の例では、生徒は教師—生徒関係を男女関係にすり替えて叱責を免れている。教師と生徒の性別による相互交渉の違いは興味深いテーマである。

●男性教師、逃げる生徒の腕をつかんでとりおさえる。

生徒「離せよ、すけべ！」

男性教師、手を離す。

- (3) マクロビー(1991)の研究では、こうした学校への「反抗」のかたちは女子のサブカルチャーに独特のものだと述べられている。

- (4) 以下インタビューの抜粋には、インタビューを行った順のグループの番号を行末に付す。括弧内はコースを示す。名前はすべて仮名である。
- (5) コンパが、他の主に男子校のグループと行われるのに対し、紹介は一組の男女がもう一組の男女を引き合わせることを指す。
- (6) 英米の研究では、勉強グループにあたる生徒たちが、セクシーであることや男性に魅力的であることを高く評価していることが報告されている。サブカルチャーに現れる「ジェンダー」の側面が文化によって異なることは興味深い。
- (7) 公的領域への志向性をもつ生徒でも、「家事も全部自分でやる」「主婦はこうあるべきというのが強い」など、家庭との葛藤を示す場合があった。このことは性役割が一枚岩ではないことを示している。

〈参考文献〉

- 天野正子 1988, 「『性と教育』研究の現代的課題——かくされた『領域』の持続」『社会学評論』155号, 266-283頁。
- Anyon, J. 1983, "Intersections of Gender and Class: Accommodation and Affluent Females to Contradictory Sex - Role Ideologies", in *Gender, Class and Education*, The Farmer Press, pp. 19 - 38.
- Davies, L. 1983, "Gender, Resistance and Power", in *Gender, Class and Education*, The Farmer Press, pp. 39 - 52.
- 藤田英典, 潮木守一, 滝充 1978, 「中学校文化の構造的分析」『名古屋大学教育学部紀要』第27巻。
- Hargreaves, D. H. 1967, *Social Relations in a Secondary School*, RKP.
- 木村涼子 1990, 「ジェンダーと学校文化」長尾彰夫, 池田寛編『学校文化』東信堂, 147-170頁。
- 石戸教嗣 1982, 「男女差から見た“かくれたカリキュラム”」京都大学教育社会学研究室『「学校風土」と「かくれたカリキュラム」に関する教育社会学的研究』No. 1, 35-41頁。
- Lacy, C. 1970, *Hightown Grammar*. Manchester University Press.
- Llewellyn, M. 1980, "Studying girls at school: the implications of confusion", in *Schooling for Women's Work*, ed. by Deem, R., RKP, pp. 42 - 51.
- McRobbie, A. 1991, "The Culture of Working Class", in *Feminism and Youth Culture*, MACMILLAN, pp. 35 - 60.

ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス

- 耳塚寛明 1980, 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集。
- 耳塚寛明 1982, 「反学校的仲間集団の構造と文化」日本教育社会学会第34回報告。
- 宮崎あゆみ 1992, 「女子校におけるジェンダー・サブカルチャー——女性性への適応と反抗の過程」『東京大学教育学部紀要』第32巻, 170-177頁。
- Willis, P. 1977, 熊沢誠, 山田潤訳, 1985『ハマータウンの野郎ども』, 筑摩書房。